「社会福祉法人 白鳩会」と「農事組合法人 根占生産組合」

農林水産政策研究所　飯田　恭子・吉田　行郷・藤田　義紀

１．社会福祉法人白鳩会の概要

社会福祉法人白鳩会は 1972 年に鹿児島県の大隅半島に設立された。法人本部は，南大隅町にある。白鳩会は障害のある人々に「豊かな自然とおおらかな人情に恵まれた田園地帯で，安心して心身ともに健康に生活できる場を提供」している。白鳩会は大隅半島の「おおすみエリア」と鹿児島市の「かごしまエリア」に拠点を構えている(1)。

白鳩会では障害福祉サービスの短期入所（ショートステイ），生活介護，施設入所支援，就労移行支援，就労継続支援 A 型，就労継続支援 B 型，共同生活援助（グループホーム）を提供している。また，相談支援事業，日中一時支援，地域活動支援事業等も行っている。

白鳩会では知的障害者を中心に，精神障害者や後天性の難病のある人を利用者もしくは職員として受け入れている。また，2010 年頃からは，触法障害者と養護学校の非行者も受け入れている。

２．白鳩会における障害者就労

社会福祉法人白鳩会常務理事の中村邦子氏によると，2018 年 4 月現在，白鳩会で障害福祉サービスの日中活動を利用している人は 214 人である（第 1 表）。その内訳は，生活介護が 91 人，就労移行支援が 1 人，就労継続支援 A 型が 8 人，就労継続支援 B が 114 人となっている。このうち，給料または工賃を得て働く人は，就労系の支援サービスを利用する 123 人と生活介護の利用者 9 人の，あわせて 132 人となっている。

白鳩会では，設立当初から障害者が農業分野で働いている。1978 年には，農業を本格化させるなかで，「農事組合法人根占生産組合」が白鳩会の関連組織として別途設立された。その後，白鳩会と根占生産組合が連携しながら，おおすみエリアにある「花の木農場」で農業と農産物の加工を営んでいる。白鳩会は障害者の生活と就労を支援する施設を 1980 年代から段階的におおすみエリアにおいて整備している。2018 年現在，花の木農場には「花の木ファーム」と「セルプ花の木」という二つの事業所がある。

白鳩会は，2000 年以降，都市に生活する障害者の生活と就労を支援するために「花の木大豆工房」，「花の木冷菓堂」，「花の木カノン」をかごしまエリアに開設している。これらの事業所では，食品加工等の分野で障害者が働いている。第 2 表は，白鳩会の就労系の事業所における定員と利用人員等を示したものである。

かごしまエリアの事業所は付属のアンテナショップにて，自ら加工した豆腐やジェラート等とあわせて，花の木農場で生産された緑茶や豚肉，総菜等も販売している。鹿児島市は，大隅半島で生産された農産品の消費地でもある。かごしまエリアの事業所は，白鳩会の情報発信の拠点としても重要な役割を果たしている。

第１表　白鳩会が提供する日中活動の障害福祉サービス（2018 年 4 月 1 日現在）

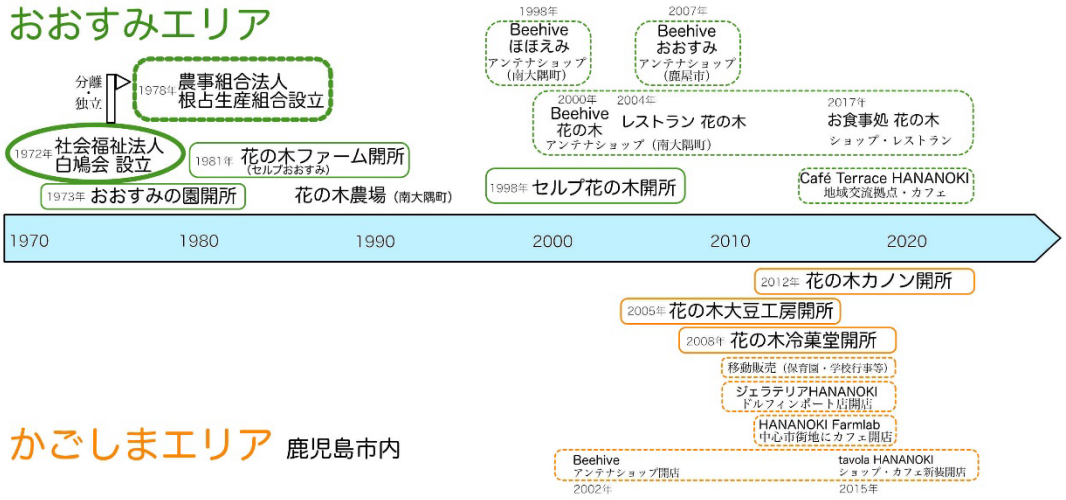
日中活動＼住居場所		施設入所 注1)	GH 注2)	住宅	計
生活保護		60	12（1）注4)	19（8）注4)	91（9）注4)
就労系 注3)	就労移行			1	1
	A 型		7	1	8
	B 型	32	41	41	114
計		92	60	62	214

資料：社会福祉法人白鳩会 常務理事 中村邦子氏による作成.
注 1） 施設入所からは一般就労（企業）への通勤はできない．日中活動支援のみ利用が可能である．
注 2） GH（グループホーム）からは一般就労，日中活動利用ともに可能である．
注 3） 就労系支援のすべての利用者に工賃（賃金）が支給されている．
注 4） （ ）内の数字は生活介護の利用者のうち，工賃が支給されている利用者の数.

第２表　白鳩会の就労系事業所の事業実績（2017 年度）

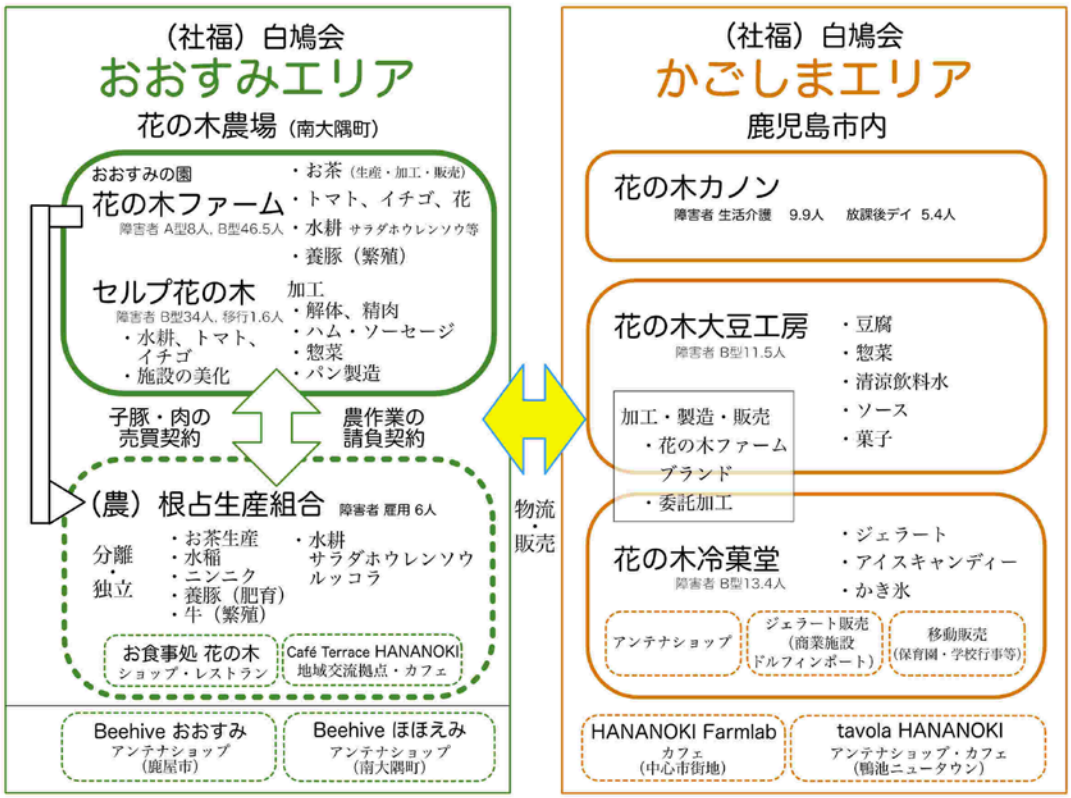
	施設の名称	施設定員(利用人員/日)等	事業活動資金収支差額率 注1)	就労支援事業収益割合 注2)	福祉サービス等事業収益割合 注3)	備考・施設の立地
	法人全体	－	14.4	17.7	79.1	本部及びグループホームを含む
1	花の木ファーム	就労継続支援 A 型 10 人(8.0 人) 就労継続支援 B 型 50 人(46.5 人) 施設入所支援 30 人(28.1 人) 短期入所	19.1	32.5	66.6	おおすみエリア
2	セルプ花の木	就労継続支援 B 型 28 人(34.0 人) 就労移行支援 6 人(1.6 人) 生活介護 6 人(6.0 人)	10.9	42.0	57.4	
3	花の木大豆工房	就労継続支援 B 型 20 人(11.5 人)	10.2	39.6	59.7	かごしまエリア
4	花の木冷菓堂	生活介護 10 人(4.3 人) 就労継続支援 B 型 10 人(13.4 人) （就労移行） 短期入所	2.4	46.4	53.2	
5	花の木カノン	生活介護 10 人(4.9 人) 就労継続支援 B 型 10 人(7.4 人)	△17.0	27.7	71.8	

資料：中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム
－ 一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.
注 1）事業活動資金収支差額率＝「事業活動資金収支差額」/「事業活動収入計」×100
（参考）東京都公表の平成 28 年度財務指標平均値.
障害者支援施設の事業活動資金収支差額率 12.9%.
注 2）就労支援事業収益割合＝「就労支援事業収入」/「事業活動収入計」×100
注 3）福祉サービス等事業収益割合＝「障害福祉サービス等事業収入」/「事業活動収入計」×100



資料：2018 年に実施した聞き取り調査に基づき筆者作成.
注：「お食事処花の木」と「Café Terrace HANANOKI」は農事組合法人根占生産組合が経営している.

第１図　白鳩会の農業と食品加工・販売等の取組の経緯



資料：2018 年に実施した聞き取り調査に基づき筆者作成．2019 年 7 月に修正.

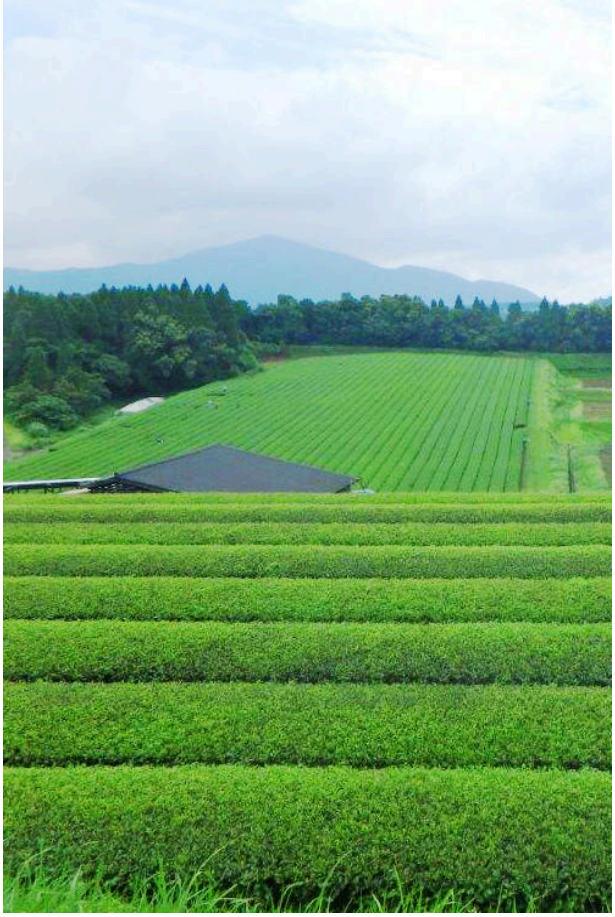
第２図　白鳩会と根占生産組合における障害者の就労の概要

３．おおすみエリアの「花の木農場」

（１）花の木農場の全体像（2018 年現在の概要）

おおすみエリアにある花の木農場には，花の木ファームとセルプ花の木という白鳩会の就労系の事業所があり，障害者が農業と食品加工等の分野で働いている。また，白鳩会から独立した農事組合法人根占生産組合が，花の木農場で営農している[2]。

花の木農場では，土耕，水耕，畜産と食品加工が多様に営まれ，障害者がそれぞれの個性に合った仕事に取り組んでいる。白鳩会と根占生産組合は，農作業の請負や生産品の売買契約を結び，組織的に連携しながら農業と 6 次産業化に取り組んでいる（第 2 図）。



資料：筆者による撮影.

第３図　花の木農場の茶園

花の木農場には 45.1 ヘクタールの農地がある。農地は，白鳩会が 9.8 ヘクタール（21.7%），根占生産組合が 9.1 ヘクタール（20.2%）所有している。また，借地が 26.2 ヘクタール（58.1%）ある。

2018 年における作付面積は茶園が 7 ヘクタール，ニンニクが 5.4 ヘクタール，水田が 4 ヘクタール，飼料畑が 3 ヘクタールとなっている。また，2.5 ヘクタールに野菜を作付けしている。温室は 1 ヘクタールあり，トマト，イチゴ，花の苗を栽培している。また，サラダホウレンソウとルッコラを水耕栽培している。

（２）花の木ファーム

花の木ファームは花の木農場で農業と農産物の加工を行っている。茶は花の木ファームの年間売上の約半分を占める重要な産品であり，生産から加工，販売までを一貫して手がけている。茶の一部は，有機 JAS の認定を受けている。

花の木ファームは，農場内の製茶工場で，主に根占生産組合の生葉と自ら収穫した生葉を加工している。加工する茶葉の割合は，根占生産組合産が約 90%，花の木ファーム産が約 10%となっている。その他にも，地域の農家が生産した茶葉も加工している。

花の木ファームの前身は，1981 年から続くセルプおおすみである。事業所は 2016 年に移転，新築し，花の木ファームが誕生した。

資料：筆者による撮影.

第４図　花の木ファームの製茶工場

茶の他にも，花の木ファームは温室でトマト，イチゴ，花の苗を栽培し，サラダホウレンソウを水耕栽培している。2013 年には，ニンニクの作付けも始めている(3)。2017 年現在，花の木ファームでは職員が 20 人と障害者が 49 人働いている。作業班ごとに作業内容と従事者数を示したものが第 3 表である。

資料：社会福祉法人白鳩会の提供.

第５図　花の木ファームの養豚

花の木ファームは養豚も営んでいる。繁殖した子豚は，根占生産組合に販売されている。母豚は，年に 2 回程分べんしている。近年では豚舎の老朽化が進み，子豚の不慮の事故を防ぐことが困難なため，施設・設備の近代化が早急の課題となっている。

第３表　花の木ファームにおける就労の概況（2017 年度）

作業班名称	従事者数		作業内容
	職員	障害者	
養豚班	2	16	交配・分べん補助，給餌，堆肥取り，豚舎清掃，出荷
茶園班	2	12	定植，水やり，薬剤散布，施肥，除草，摘採
茶製造班	2	2	製造補助，工場掃除，除草
茶加工班	1	2	茶箱詰め，真空パック，しおり入れ，除草
水耕班	3	4	収穫，出荷準備，双葉取り，ハウス清掃
にんにく班	5	7	種消毒，種まき，収穫，選別，除草
トマト班	2	3	ハウス設置，芽掛け・水やり補助，除草
花班	3	3	施肥，水やり，堆肥づくり，腐葉土づくり

資料：中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム
– 一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.

（３）セルプ花の木

セルプ花の木では，障害者が豚肉の加工とパン製造に従事している。また，花の木ファームと同様の農作業を行う農耕班，さらには，施設内外を清掃管理する美化班がある。就労継続支援 B 型，就労移行支援，生活介護の利用者が，あわせて 40 人就労している（第 2 表，第 4 表）。

第４表　セルプ花の木における就労の概況（2017 年度）

作業班名称	従事者数		作業内容
	職員	障害者	
ハム・ソーセージ班	1	4	漬け込み肉整形，ソーセージづくり，殺菌，包装，清掃，出荷準備
精肉班	1	2	パック詰め，清掃，出荷準備
解体班	1	4	脱骨，整形作業，清掃
惣菜班	2	5	ハンバーグ・コロッケ・餃子づくり，パック詰め，野菜切り，計量
パン班	2	5	種・生地の整形，包装作業，計量
農耕班	2	12	（花の木ファームの土耕作業内容と同じ）
美化班	2	8	施設内外の清掃

資料：中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム
– 一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.

セルプ花の木は，花の木農場で営農する根占生産組合から，加工用の豚を年間 800 頭分，枝肉で仕入れている。加工では，解体班が脱骨と整形作業を行い，精肉班がパック詰めと出荷準備を行っている。セルプ花の木には JA を定年退職した技術員が職員として勤務しており，豚肉加工の指導にあたっている。指導員によると，衛生面に注意を払い，安全に効率よく作業できるようになるまでには，約 2 年間の就労の経験が必要とされる。セルプ花の木では，障害のある就労者が，こうした難しい仕事も担当できる程にスキルをつけている。

ハム・ソーセージ班は，漬け込み肉の整形，ソーセージづくり，殺菌，包装，出荷準備を行っている。セルプ花の木が製造するハムとソーセージには，トラディショナル部門とプレミアム部門の二つのクラスがある。トラディショナル部門の製造技術は，ドイツのマイスターに技術指導を受けた職人が，製造開始時に導入したものである。その後には，フレンチ料理のシェフを職員として迎え，プレミアム部門も立ち上げている。

いずれの部門の製造でも，食品添加物の使用ができる限り控えられている。とりわけプレミアム部門では，トレハロース以外の食品添加物を使用しない加工方法に特別のこだわりがある。生産量の比率は，トラディショナル部門が 70%，プレミアム部門が 30%となっている。いずれの部門の製品も保存期間が短いため，加工施設内で冷凍して出荷される。一方，冷凍により製品の風味が落ちるというデメリットもあることから，さらなる食味の向上にむけて冷凍機材の改善が課題となっている。

惣菜班は，自家製の豚肉を使用したハンバーグとコロッケ，餃子を加工し，パック詰めを行っている。セルプ花の木は，根占生産組合をはじめとする畜産農家から豚を一頭まるごと買い取るため，全ての部位を無駄なく加工して，販売する必要がある。例えばモモ肉は，精肉で販売すると脂肪が少なくて食味が劣るが，セルプ花の木ではレシピを工夫することで風味の良い惣菜に加工している。

パン班は，パン種・生地の整形，包装作業を行っている。かごしまエリアには，白鳩会の他の事業所が営むホットドック店があることから，ソーセージとの相性が良いパンを製造して出荷している。また，ラスクの製造も手がけている。

（４）農事組合法人根占生産組合[4]

社会福祉法人白鳩会の設立当初，中村隆重理事長は，障害者に働く喜びを実感してもらうために，日課の一つとして農業を取り入れた。当時，白鳩会の障害者は，一般社会での就労を目指して訓練を積んでいた。しかし，過疎化が進む地域には働く場が不足しており，就労訓練を経ても一般就労という目標を達成することは難しかった。

このため中村理事長は，福祉施設の中に障害者の働く場をつくる方針へと戦略を切り替える決断を下した。大隅半島では，温暖な気候を生かした野菜や果実の栽培，畜産が盛んである。白鳩会は，障害者が働いて収入を得られるように，それまで取り組んできた農業の規模拡大と企業的な経営を目指していった。

しかし，そのような方向転換の先にも，解決しなくてはならない課題が山積していた。当時の福祉行政と地域社会には，障害者の就労に対する理解が醸成されておらず，社会福祉法人である白鳩会が農地を取得することは困難であった。そこで 1978 年，白鳩会の役員等が

農事組合法人根占生産組合を別途設立し，農場の用地を確保するに至った。白鳩会は農事組合法人を設立した主な利点として以下をあげている。

① 土地の集積と生産基盤の整備が可能となる
② 農業共済への加入により，飼料購入等における支援策の活用が可能となる
③ 6 次産業化による障害者の自立支援が可能となる
④ 地域農業との連携が可能となる

花の木農場が立地する大隅半島は，鹿児島市や関東地方といった消費地から遠く，生鮮野菜を生産しても輸送や販売が容易ではない。そこで，根占生産組合は農場内で加工できて，保存できる「茶」を農業生産の中心に据えることとした。1970 年代末に生産組合は茶園を開き，1980 年代に入って茶葉が収穫期を迎えた頃からは，障害者に安定的に工賃を支えるようになった。そして，1990 年代の中頃には，生産組合は 10 人の障害者を雇用するまでに成長を遂げた。2018 年現在，花の木農場には白鳩会の農地も含めて 7 ヘクタールの茶園が広がっている。

2018 年 9 月現在，根占生産組合は 28 人を雇用しており，うち 6 人が障害者である。生産組合はニンニク栽培と水田耕作，サラダホウレンソウとルッコラの水耕栽培も手がけている。水耕栽培の温室は，平成 8 年度に福祉行政の補助事業で建設したものを引き続き使用している[5]。温室の建設当時は，花の育苗を手がけていたが，地方公共団体の公園緑地の管理予算が縮小するなかで苗の注文は減少し，野菜の水耕栽培に転換することとなった。水耕野菜の販売は順調で，収穫した生産品は常に完売する状況となっている。

根占生産組合は，養豚も手がけている。白鳩会の花の木ファームから生後 3 か月の子豚を購入し，1 歳頃まで肥育している。豚の年間の出荷頭数は約 2,000 頭で，うち 800 頭は，白鳩会のセルプ花の木に枝肉で出荷している。また，32 頭の繁殖牛も飼育している。家畜の尿は浄化槽で処理し，堆肥は熟成させて露地野菜の栽培に利用している。

（5）アンテナショップとカフェ・飲食店

白鳩会の各施設と事業所は給食の材料として，自家製の農産物や食品を購入している。また，生産品は白鳩会の飲食店やカフェでも使用され，アンテナショップで販売されている。アンテナショップの主要な顧客は，障害者の家族と親戚である。また，JA 系の物産館でも白鳩会の生産品が販売されている。花の木農場のロゴや CI は，広告代理店の勤務経験者がデザインした（第 6 図）。近年は，鹿児島市内のデザイン事務所が，白鳩会の生産品のパッケージを一貫して手がけている。

資料：筆者による撮影.

第６図　花の木農場の食事処とカフェの看板

４．かごしまエリアにおける農産物の加工・販売

かごしまエリアに白鳩会が拠点を立ち上げた背景には，社会保障制度の改革があった。障害者の脱施設化と地域自立生活が推進されるなかで，大隅半島の福祉施設を利用していた多くの障害者が，鹿児島市内に戻ることとなった。市内に戻る障害者のために現地で就労の場をつくることが，大きな課題となっていた(6)。

また，鹿児島市にある特別支援学校の生徒が，卒業後に市内で働くことを望むことから，市内での職場づくりが求められていた(7)。白鳩会は，花の木農場の生産品を鹿児島市に届けて，市内の人々との交流を通じて，大隅半島の良さを伝えたいとも考えていた。これらの理由から，白鳩会はアンテナショップの開設を皮切りに，2000 年頃からかごしまエリアの事業所を段階的に整備していった。

（１）花の木大豆工房

2005 年，白鳩会はかごしまエリアに「花の木大豆工房」を開設した。2018 年現在では，就労継続支援 B 型を提供しており，13 人の障害者が自宅またはグループホームから通って働いている。また，7 人の職員が勤務している。

大豆工房は，多くの若者が働く職場となっている。花の木大豆工房は，総菜，豆腐，菓子，清涼飲料水，ソースの五つの部門の営業許可を受けている。白鳩会の理事が過去に豆腐を製造していたことから，大豆工房に製造技術を導入できた。工房では，高品質の九州産大豆を

原材料に豆乳，絹豆腐，ピーナッツ豆腐，豆乳ドリンクを製造している。生産品の購買者は，国産大豆の使用に対する関心が高い[8]。

大豆工房で働いている障害者は，丁寧な作業が得意である。その個性を活かして，手間をかけて原材料を選別しているため，高品質の製品が完成する。生産品の種類は日によって異なり，多品目で少量生産している。生産量は，注文が多い時には一日あたり 90kg 程である。豆腐は午前中に製造され，午後に配達と翌日の仕込みが行われている。

資料：筆者による撮影.

第７図　花の木大豆工房での作業

花の木大豆工房は，果物や野菜をペースト加工する作業場がある。加工したペーストは，後述する花の木冷菓堂にジェラートの原材料として供給している。近年では，県内の農家等からの受託加工も増加傾向にある[9]。

花の木大豆工房の生産品は，白鳩会の各施設と事業所にて給食の材料として使用されている。また，一般の消費者に対しては，JA 系の物産館，生協コープかごしま，おおすみエリアとかごしまエリアにある白鳩会のアンテナショップ及び飲食店で販売されている。その他にも，移動販売車で直売している。また，さつま揚げの原材料として，規格外の豆腐が薩摩川内の加工場に出荷されている。

花の木大豆工房の生産品は消費者に高く評価されており，各種の表彰も受けている。白鳩会は，大豆工房の知名度やブランド力を高めるうえで，かごしまエリアでのマーケティングが重要と考えている。さらなる販路の確保は，今後の課題である。

（２）花の木冷菓堂

2008 年，白鳩会はかごしまエリアに「花の木冷菓堂」を開設した。花の木冷菓堂は，障害者就労支援事業として日本で初めてジェラート製造に取り組んだ事業所である。冷菓堂の入っている建物は，福祉行政の支援を受けて改修された。また，日本財団が都市における障害者の就労支援に賛同し，ジェラート製造に必要な機材の整備を支援した。

花の木冷菓堂はかごしまエリアの本部まで徒歩 5 分の立地にある。大豆工房には徒歩 10 分で移動できる。花の木冷菓堂では，就労継続支援 B 型の利用者が 13 人程就労している。ジェラート製造や製菓に関心のある女性が多く，冷菓堂はかごしまエリアで人気の高い職場となっている。

花の木冷菓堂の施設長は，イタリアで飲食業を学んだ経験を持っている。施設長が勤務した飲食店では，オーナーが自閉症の親戚のためにジェラート店を経営していた。そこで施設長が働いた際に，ジェラート製造は装置産業であり，機械さえあれば，体力のない人や重度の障害者でも取り組むことができることに気付いたという。

花の木冷菓堂のレシピは，イタリアで伝授された 15 種類のレシピを基本としている。冷菓堂の設立当初は，ジェラート用の冷凍庫のスペースに合わせて，14 種類の商品が開発された。イタリア人と日本人では味の好みが異なる。2 年間程の開発期間を経て，日本人の好みに合うレシピが完成した頃には，ジェラートの販売量が増加し，経営も軌道に乗っていった。現在は，年間で 60 種類のジェラートが製造されている。夏はシャーベット，秋・冬はアイスミルクが商品の中心となっている。一度に店頭に並ぶのは 20 種類で，うち 3 分の 1 が季節限定の商品，3 分の 2 が定番の商品となっている。

花の木冷菓堂のジェラートの原材料となる果物や野菜等の約 3 分の 1 は，大隅半島産である。夏にはトマトのシャーベットも提供されている。生協のプライベートブランドである大隅半島産の牛乳も，原材料として使用されている。鹿児島県の産品を使用したジェラートもある。サトウキビの産地である奄美群島の喜界島の黒糖を使った「黒糖塩キャラメル」と「黒糖焼酎レーズン」は，消費者に人気がある。

資料：筆者による撮影.

第８図　花の木冷菓堂の店 tavola HANANOKI

冷菓堂は，製造したジェラートの大部分を直売している。開設 4 年目の 2011 年には，鹿児島市内の商業施設「ドルフィンポート」に直売店を開店している。ジェラートは移動販売もしており，5 月から 11 月にかけて 30 か所くらいの場所で販売している。例えば，鹿児島市内のマンションの夏祭りをはじめ，保育園，幼稚園，小・中学校，特別支援学校のイベントで販売している。また，おおすみエリアでも白鳩会主催の「納涼大会」にて販売している。JA 系の物産館では，冷蔵のスイーツを販売している(10)。

ジェラートは県外にも出荷している。出荷先は東京の代官山と青山にあるジェラート店である。消費者は，鹿児島県産に好印象を持つようで，店舗により「鹿児島・花の木」という表示が出ている。ジェラートの在庫は，物流倉庫の冷凍庫に保管されている。

花の木冷菓堂では，離島も含む鹿児島県内の農家からの依頼により，規格外の果物を使用したアイスクリームを受託加工している。マンゴー農家，タンカン農家，茶農家からの依頼がある。定期的に依頼のある農家が 4 件ある。また，年間を通じての取引先が 7 件あり，17 種類の商品を受託製造している。その他にも，不定期に年間で 5 件程の依頼がある。冷菓堂では，アイスクリームは 50 個から受託加工しており，100 個単位で製造することが多い。このように冷菓堂の加工施設は，地域の 6 次産業化に貢献している。

一方，県外のレストランや食品製造業からも，オリジナルのレシピによるジェラートや製

菓材料の加工依頼がある。2018 年現在，15 種類のオリジナル商品や原材料の加工を受注している。例えば，鹿児島出身のオーナーである「GOOD NEIGHBORS' FINE FOODS」が手がけている菓子研究家・福田里香氏のレシピによるアイスキャンディー「mikaned（ミカンド)」の受注加工をしている。また，花の木農場産のブルーベリーを用いた地ビールの開発の話も挙がっている。

上記の他にも，花の木冷菓堂では就労継続支援 B 型の利用者が，ラベル貼り，食堂での調理，カフェの業務をしている。

（３）花の木カノン

2012 年，白鳩会は「花の木カノン」を開設した。2018 年現在では，生活介護と放課後等のデイサービスが提供されている。花の木カノンでは，白鳩会の諸製品の箱詰めに使用する緩衝材づくりをしている。

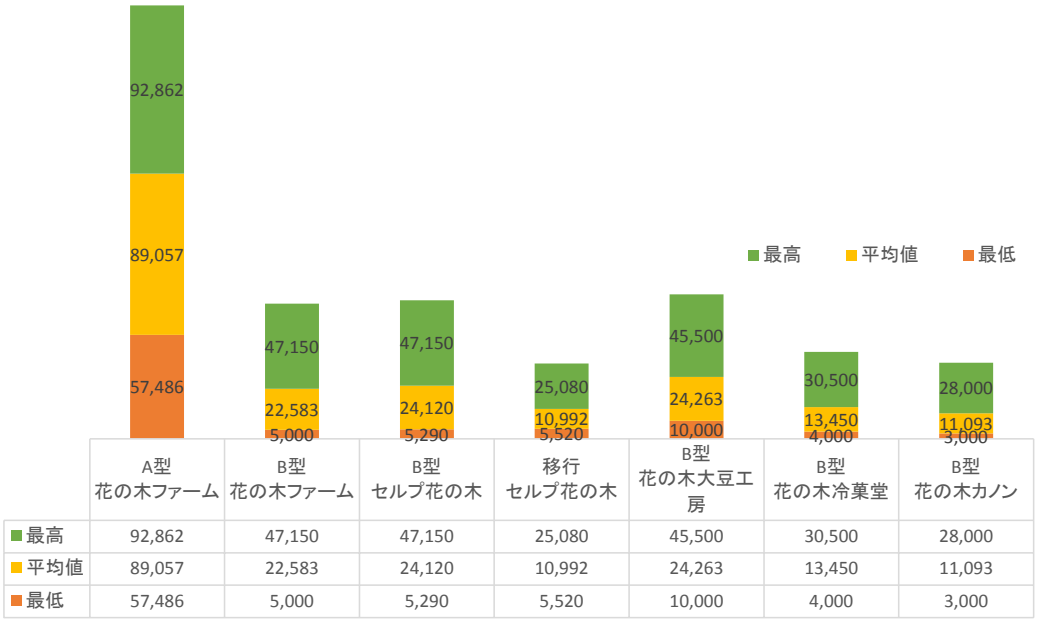
（４）おおすみエリア・かごしまエリア間の生産品の配送

白鳩会の数々の事業所が生産した農産物や食品，製品は，委託業者により配送されている。効率の良い配送システムが考案されており，おおすみエリアとかごしまエリアの間で，生産品が相互に配送されている。具体的には，早朝におおすみエリアの花の木農場から野菜や肉，惣菜等を積んだトラックが出発する。それらの生産品は，午前中にかごしまエリアの各事業所のアンテナショップ，カフェ，食堂に配達される。このトラックは，上記の配達時に豆腐やジェラート等，かごしまエリアの事業所が製造した生産品を集荷する。午後にトラックはおおすみエリアに戻り，かごしまエリアの製品を各施設や事業所，販売先へと届けている。

５．白鳩会の農福連携による効果

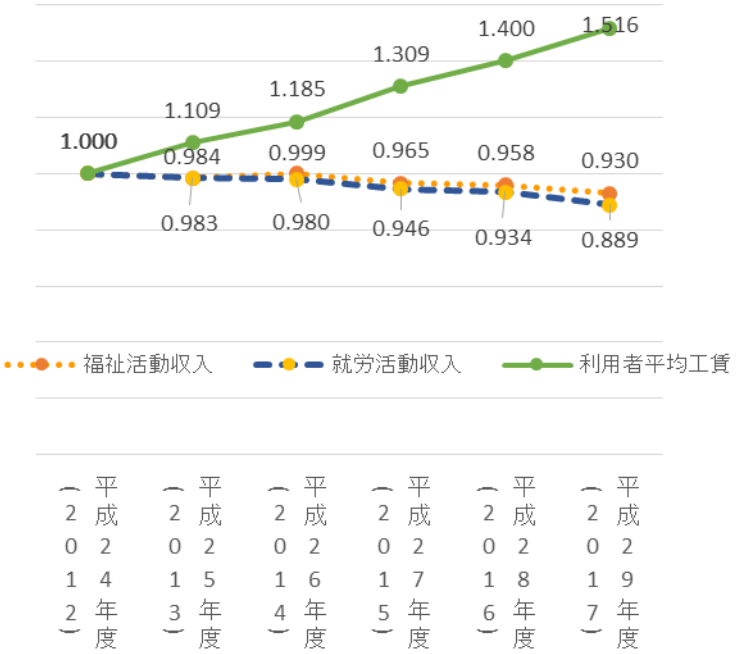
（１）障害者の工賃（賃金）の向上

厚生労働省によると，2017 年度における就労継続支援 B 型の工賃の平均値は，月額で約 15,600 円となっている。また，就労継続支援 A 型の賃金の平均値が月額で約 74,000 円となっている。白鳩会で就労継続支援 B 型を利用する障害者の工賃の平均値は，全国平均よりも高く，月額で約 2 万円となっている。また，就労継続支援 A 型でも賃金が全国平均よりも高く，月額で約 9 万円となっている（2017 年度，第 9 図)。白鳩会では，障害者が自立できるまでに工賃を高めていくことを目指して，農業と 6 次産業化に取り組み続けている。近年では，茶の価格が低迷したことにより，収入が減少傾向にある。しかし，白鳩会は経費の削減を通じて障害者の工賃を増加させている（第 10 図)。



資料：中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム
– 一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.
注：平成 29 年度（2017 年度），月額，単位：円.

第９図　白鳩会の事業所における障害者の工賃（賃金）



資料：中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム
– 一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.

第 10 図　白鳩会の活動収入と工賃（賃金）の推移

（２）障害者のスキルアップと就職支援

白鳩会では，障害者の希望に添う形で職種や働き方が選択されている。例えば，季節や曜日，時間帯等によって食品加工と農耕，畜産を組み合わせて働くことができる。白鳩会の職員は，障害者がそれぞれの関心と個性にあった働き方ができるように工夫している。障害者が自信と誇りを持って働くためには，そうした支援が重要と考えている。職員の観察によると，障害者は作業に適応するまでに比較的に長い時間を要する。一方，責任を持って仕事をやり遂げることができる。

農業や食品加工の分野では，チームワークでの作業が求められる。障害者はチームワークで働くことを通じて，コミュニケーション力を高めることができる。他にも，食品加工部門では，衛生管理に関する知識と技術を身につけられる。白鳩会での就労経験を通じてスキルアップし，一般の職場に就職する障害者もいる。過去 5 年間を見ると，5 人の障害者が一般の職場に就職している。就職先での仕事の内容は，スーパーマーケットにおける商品の陳列業務，運送業での仕分け業務，病院の調理補助，食肉加工業務，農業となっている。

（３）過疎化する農村地域における農業と農村の振興

2018 年現在，白鳩会では 132 人の障害者と 134 人の職員が働いている。特別支援学校の卒業生が，就労支援事業等の利用者として白鳩会に迎え入れられている。白鳩会の農福連携の取組は，過疎地域において障害者に就労の場を提供するのみでなく，健常者の雇用の機会を創出する観点からも重要である。

白鳩会の事業所は，鹿児島県内の農家が生産した茶，大豆，果物，野菜，生乳等も加工・販売しており，農福連携を通じて農村地域の 6 次産業化に寄与している。白鳩会と根占生産組合は，花の木農場で約 45 ヘクタールの農地を管理している。農地の約 6 割は，近隣農家からの借地となっている。近隣農家の高齢化が進むなかで，耕作放棄地の発生を抑制している。白鳩会は，過疎化する農村地域において農福連携を通じて，農業と農村の振興と維持に大きく貢献している。

（４）農村地域における交流の場づくり

花の木農場には，自家養豚場の豚肉料理が食べられる地産地消レストラン，茶園を眺めながら自家製のジェラートが味わえるカフェ，野菜や緑茶，パン，焼き菓子を購入できるアンテナショップがある。農場では，毎年 5 月と 10 月に野外フェスティバルが開催されている。野外ステージではプロの歌手を迎えたチャリティコンサートが開かれ，イベント会場では白鳩会の人々がうどんや花の木バーガー等を準備して，訪れる人々をもてなしている。花の木農場は，地域の人々に交流の場を提供している。

（５）農福連携の営みがつくる特別な場所

花の木農場には山麓の風景を背景に，高原の茶園や農地が広がっている。農場の敷地にはバラの咲くイングリッシュガーデンがあり，四季折々の草花が咲いて，訪れる人々の目を楽しませている。白鳩会の人々が組みあげた石垣，古い鉄道車両のたたずむ丘，彫刻が点在する庭園は，いずれも細部まで手入れされている。障害者が働く温室，食品加工の工房，事務所，飲食店，カフェテラス，グループホームの建物も農場の風景に調和している。花の木農場は，農福連携の日々の丁寧な営みが積み重なることによって形成され，手入れされ続けている。農場は，かけがえのないオリジナリティのある特別な場所となっている。

白鳩会は，過疎化した農村地域を活性化させるために，農福連携と大隅半島の観光資源を結びつけた「農福観連携」を構想している。花の木農場は，それ自身も地域の貴重な観光資源として位置づけられる輝きを有している。

資料：筆者による撮影.

第 11 図　花の木農場の風景

６．おわりに

白鳩会は 1972 年の設立以降，長い歳月をかけて農業経営を軌道に乗せてきた。また，農産物の加工部門と販売ルートを構築し，農村地域の 6 次産業化に寄与してきた。白鳩会の農福連携を通じて障害者と健常者が共に働く場が，大隅半島と鹿児島市内に次々と整備されてきた。

白鳩会では障害者の個性が尊重され，それぞれに合う暮らしと働き方ができるように配慮されている。一方では，障害者が一般社会で働ける日が来るように，そのスキルアップを念頭に入れて長期的に支援している。

大隅半島の過疎化や農家の高齢化が進むなかで，白鳩会は半島の温暖で風光明媚な土地柄を活かし，農福連携と観光を結びつけた「農福観連携」による農村振興を模索している(19)。白鳩会の農福連携の営みは，農福連携の枠組みを超えて，さらに広く地域の多様な主体と結びつこうとしている。

謝辞

社会福祉法人白鳩会の中村隆重理事長をはじめ，白鳩会の皆様には 2018 年 7 月 31 日と 8 月 1 日の二日間にわたり，ご多忙のなか聞き取り調査と現地調査にご協力いただきました。この調査では，花の木農場とかごしまエリアの各事業所を訪ね，白鳩会による農福連携の取組の仕組と日々の丁寧な営みについて知りました。

大変に貴重なお話をお伺いできまして，皆様には誠に感謝しております。とりわけ常務理事の中村邦子様には，調査後も様々な場面においてご教示いただいております。

末筆となりますが，白鳩会の皆様に心より御礼申し上げます。

注

(1) おおすみエリアにある「おおすみの園」は，施設入所支援，生活介護，短期入所（ショートステイ）を提供している。また，「花の木ファーム」（旧セルプおおすみ）は施設入所支援，短期入所，就労継続支援 A 型，就労継続支援 B 型，「セルプ花の木」は就労移行支援，就労継続支援 B 型，生活介護を提供している。かごしまエリアにある「花の木大豆工房」は就労継続支援 B 型，「花の木冷菓堂」は就労継続支援 B 型，「花の木カノン」は生活介護と放課後等デイサービス，短期入所を提供している（2018 年現在）。

(2) 花の木農場は，白鳩会の花の木ファームとセルプ花の木，根占生産組合が営農する農場の総称である。

(3) ニンニクは 10 月から植え付けされ，4 月から 5 月にかけて収穫される。温室内で 32 度程度の風をあてて乾燥させて，6 月中旬から 11 月にかけて販売される。ニンニクは市内の飲食店に出荷されている。また，商業施設「ドルフィンポート」の物産店でも販売されている。

(4) 中村隆重(2013)及び中村隆重理事長の 2018 年の本調査時のインタビューより。

(5) 1994 年に 1,000 平方メートルの温室を 3 棟建設して花のポット苗の生産を始めた。現在，水耕栽培にはナッパーランドを使用している。育苗には，温度と光，灌水を適切に管理する専用施設，苗テラスを使用している。

(6) 大隅半島にある白鳩会の入所施設では，鹿児島市出身の障害者も生活していた。障害者の脱施設化が推進されるなかで，鹿児島市出身の障害者は大隅半島から市内へと戻ることとなった。白鳩会は，鹿児島市出身者を支援できなくなることを懸念していた。福祉制度の改正に

伴い，法人本部の遠方にも事業所が開設できるようになり，鹿児島市内に事業所が開設されるに至った。

(7) 鹿児島市内の特別支援学校の生徒が花の木農場で実習している。しかし，卒業後の就労先には，鹿児島市内の職場を希望する生徒が多い。

(8) 花の木大豆工房の販売先である生協や JA 系の物産館の消費者は，国産の原材料を気にかける傾向がある。そのため，大豆工房は九州産大豆を使用している。工房の開設時には，白鳩会が自家栽培した大豆を使用していたが，生産品の品質を安定させることが難しかったため，九州産の原材料に変更している。

(9) 機械の大きさの都合により 5kg 以上の材料を加工している。

(10) JA の物産館では豆腐や野菜も販売されている。物産館には 2 号店と 3 号店もあり，いずれも白鳩会の生産品を販売している。

引用・参考文献

厚生労働省（2017）平成 29 年度工賃（賃金）の実績について.
https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000466693.pdf（2019 年 6 月 20 日参照）

社会福祉法人白鳩会（2018a）白鳩会のあゆみ，社会福祉法人白鳩会パンフレット，南大隅町.

社会福祉法人白鳩会（2018b）白鳩会広報誌，46 周年スタート号，No.89 春号，社会福祉法人白鳩会，南大隅町.

中村邦子（2018）（社福）白鳩会が取り組む農福連携と触法障がい者支援，平成 30 年度再犯防止シンポジウム –一般就労と福祉との狭間にある者への就労支援，法務省主催，2018 年 7 月，灘尾ホール，東京.

中村隆重（2013）小笠原嘉祐編，福祉と農業のコラボレーションで地域貢献，地域生活を支える社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国社会福祉法人経営者協議会（2013）『経営協』2013 年 8 月号，社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国社会福祉法人経営者協議会，東京.

中村隆重（2014）編集部編，過疎だって売りにする。六次産業化のパイオニア，シリーズ農と生きる障害者 2 社会福祉法人白鳩会，コトノネ 2014 Vol.12，株式会社はたらくよろこびデザイン室，東京.

中村隆重（2015）小笠原嘉祐編，障害者の自立支援を農事組合法人で実現へ - 「農福連携」「農福観連携」には福祉や地域を変える大きな力があります，シリーズ経営者の視点，『経営協』2015 年 6 月号，社会福祉法人全国社会福祉協議会・全国社会福祉法人経営者協議会，東京.

濱田健司（2012）社会福祉法人白鳩会と農事組合法人根占生産組合 – 社会福祉法人が農事組合法人を立ち上げ農業就労に取り組む，参考資料 1. 社会福祉法人，NPO 法人，農業生産法人の活用事例(4)，農業分野における障害者就労と農村活性化 - 障害者施設における農業活動に関するアンケート集計結果及び特例子会社の農業分野への進出の現状と課題について，農村活性化プロジェクト研究資料第 5 号，農林水産省農林水産政策研究所，東京.

聞き取り調査

おおすみエリア

「社会福祉法人 白鳩会」及び「農業法人 根占生産組合」

日時：8 月 1 日（水）10：30～11：00，14：45～16：00

場所：花の木ファーム会議室

協力：中村隆重理事長 兼 管理者，中村邦子常務理事（白鳩会法人本部 おおすみの園），
大久保洋平係長（花の木ファーム）

「セルプ花の木」

日時：8 月 1 日（水）11：00～12：00

場所：セルプ花の木会議室

協力：中村隆一郎（おおすみエリア長 兼 本部リクルートチーム主幹），
立神誠総務（セルプ花の木）

「花の木農場Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ」

日時：8 月 1 日（水）13：15～14：45

場所：花の木農場Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ

協力：大久保洋平係長（花の木ファーム，にんにく班），中村邦子常務理事（白鳩会法人本部 おおすみの園），立神誠総務（セルプ花の木），
18：30～窪田大智係長（花の木ファーム，養豚班）

かごしまエリア

「花の木大豆工房」

日時：7 月 31 日（火）13：30～14：15

場所：花の木大豆工房

協力：東久保道夫理事，小川美香事務局リーダー，小川氏

「花の木冷菓堂」

日時：7 月 31 日（火）14：15～15：00

場所：花の木冷菓堂

協力：東久保道夫理事，小川美香事務局リーダー，小川氏

「かごしまエリア事務局」

日時：7 月 31 日（火）15：00～16：00

場所：かごしまエリア事務局及びカフェ「tavola HANANOKI」

協力：中村祥子エリア長，東久保道夫理事，小川美香事務局リーダー，小川氏